

# Jane Austen における女性と言語\*

河 内 清 志

## Women and Women Language in Jane Austen's Works

Kiyoshi KOUCHI

### Abstract

In eighteenth century, when the English language turned into Late Modern English, “fiction” gained a prevailing position as a genre in literary arts. Some novelists in those days are well known for their magnificent style of describing adventurous things, while Jane Austen, as a female writer, has an established reputation of being very static but realistic for choosing her materials mainly from her everyday life: love and marriage, entertainment and fashion, society and human relationship, and so forth. Thus readers and researchers can reasonably, if not completely, reorganize and reconstruct the manners of women and thier language, analyzing what the female characters in Jane Austen's works talk about in their social life [TOPIC / THEME / VOCABULARY], how they talk about it [PRONUNCIATION / SYNTAX], in what kind of situation and on what sort of occasion [RULES or MODES OF ADDRESS]. In this respect this paper discusses and throws a sociolinguistic light on the women and thier language in times of Late Modern English.

### 0. Introduction

近代英語後期には、Fielding, Richardson, Stern などが現われ、「小説」がジャンルの一つとしてその確立期を迎えることとなる。一方で主人公の一見壮大な冒険談を語る作品が流行したのに対して、“A Lady” と自らの名前を明かさずに18世紀後半に文壇に登場してきた Austen は、女性の目から、主に女性達の恋愛・結婚問題や人生観など極めて日常的なものを

---

\* これは日本英文学会中国四国第43回大会におけるシンポジウム「英文学における女性の言語」での発表をもとに訂正・加筆したものである。本文中の引用は特に注を付していない場合は全て、R. W. Chapman の編集による *The Novels of Jane Austen*, Oxford (Oxford University Press) の第3版に拠るもので、括弧内にページ数を示しておくが、J. F. Burrows, *Computation into Criticism* (Oxford: Clarendon Press, 1987) の指摘により、登場人物の発話部分が最も多い Emma を中心に考察していく。尚、E は *Emma*, SS は *Sense And Sensibility*, MP は *Mansfield Park*, PP は *Pride And Prejudice* を表す。

テーマにして、当時の中流・上流階級の社会生活を写実的に描き、現代のリアリズムの起源と考えられている。

その主題の性質上、日常生活に関する要素に加え、登場人物の要旨や性格や心理状態、社会の規範に対する登場人物の作法や節度や判断力、社交・娯楽の面では舞踏会や狩りや旅やピクニックや才芸などの語彙が中心となって Austen の作品は語られていて、彼女にとってその作品とは、「生計を立てるための手段」、「小説のための小説」というよりは、「家族のみなを楽しませるための、そして、自らの所属する社会を少しでも皮肉って語る作り話」であった。

Dr. Johnson 風の均整の取れた表現や、彼女の時代に特有の少しおおげさな言いまわしを作風のなかを含む「女性作家」Austen と、その Austen によって描かれた当時の女性（登場人物）たちの言語を材料に、ある一定の内容の表現法（発音、語彙、文法等）とその発話環境（副次的要素）との関係から、近代英語後期における「女性の言語」を考察する。

## 1. Jane Austen's View

ここでは Jane Austen の作品を分析し、当時の女性の一人として、彼女自身がどのようなことに関心を持ち、どのようなテーマで作品を書き上げたかを調べて、彼女の言語観を考察する。

### 1.1 Structure of Vocabulary

Jane Austen の作品に現われる中心的な語彙 (Key Word) を類型化してみると、その大半が「社会」と「人間」に関係しているものであることがわかる。とりわけ、彼女が同時代人の一人として生きていた「社会」であり、またその社会を構成し、その中で日々の生活を送っていた「人間」である。特別な出来事や非凡な人物を取り上げているのではなく、一般的な「社会」が一般的な「人間」に与えている環境や影響を、そしてその状況の中での個人や集団の生き様や生き方を Austen は描いていて、それを表すような語彙で構成されている。具体的には、次に分類した表を見てみると分かりやすい。

語い	社会	社会の内面	社会規範 (Decorum)
		社会の外表面	社交関係 (Social Intercourse)
	人間	個人の内面	性格・気質 (Personal Qualities) 感情・心理 (State of Mind)
			才芸 (Feminine Accomplishments)
	個人の外表面	容姿・容貌 (Personal Appearances)	

つまり、社会の内面にある「社会規範」に基づいて、社会の外面である「社交関係」を持ちながら、様々な内面的「性格」・「感情」・「素質」や、「容姿」・「容貌」など外面的特徴を伴った人間やその集団が描かれていることがわかるのである。

## 1. 2 Generalization

通称「一般論」と言われているこの修辞技法は、(仮にそれを真とするとして)「雪は白い。」と言明するだけでなく、「雪は白いものである。(だから/しかし、……)。」のように言外の意味を持たせることができる機能があり、Austen は物語の展開のために、これをよく用いている。中でも、*Pride And Prejudice* の冒頭の ‘It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife.’ という一節はあまりにも有名である。読者はこの語り口に対して、Jane Austen や他の読者、さらには人間一般と共通の感覚を持つことができる。あるいは共通の感覚を持たされる、とか、持ったような気になるのである。前者的機能である一般的真理の言明部分と物語の展開上、多少皮肉に語られているかもしれない後者的機能を持つ箇所を分析してみると、断片的であっても当時の一般社会の見解を知ることができるのである。先に挙げた *Pride And Prejudice* の中の「独身男性」に対して、次に *Emma* にみられる「独身女性」の一般論を引用してみよう。

A single woman, with a very narrow income, must be a ridiculous, disagreeable, old maid! the proper sport of boys and girls; but a single woman, of good fortune, is always respectable, and may be as sensible and pleasant as anybody else. (E 85)

これは主人公 Emma が自ら結婚しない女性であり続けることを正当化するための発言であるのだが、それと同時に、Emma の口を通して、Jane Austen が当時の独身女性に対する社会の一般見解を語らせているものでもあるので、その一側面を知ることができるのである。次に、Austen がこのような手法を「言語」に関して使っている個所を取り上げてみると、彼女や彼女の時代・社会の言語観が分るであろう。

## 1. 3 Attitude toward Men / Women Language

はたして、Jane Austen の時代に男性的言語・女性的言語が存在していてそれを認め知ることができるかどうか、「言語」・「言語表現」、またその周辺部分に関する一般論を挙げてみる。

(1) She read [the letter from Mr. Martin], and was surprized. The style of the letter was much above her expectation. There were not merely no grammatical errors, but as a composition it would not have disgraced a gentleman; the language, though plain, was strong and unaffected, and the sentiments it conveyed very much to the credit of the writer. It was short, but expressed good sense, warm attachment, liberality, propriety, even delicacy of feeling...

“Yes, indeed, a very good letter,” replied Emma rather slowly—“so good a letter, Harriet, that every thing considered, I think one of his sisters must have helped him. I can hardly imagine [Mr. Martin] could express himself so well, if left quite to his own powers, and yet it is not the style of a woman; no, certainly, it is too strong and concise; not diffuse enough for a woman. No doubt he is a sensible man, and I suppose may have a natural talent for—thinks strongly and clearly—and when he takes a pen in his hand, his thoughts naturally find proper words. It is so with some men. Yes, I understand the sort of mind. Vigorous, decided, with sentiments to a certain point, not coarse. A better written letter, Harriet, than I had expected.” (*E* 50-1)

これは、主人公 Emma が農夫の Robert Martin から Harriet に送られてきた手紙を Harriet に頼まれて読み、その手紙の評価を述べているところである。当時の一農夫には、まともな読み書きができるはずがない、だから間違いだらけの文面であろうと思っていたのに、Emma の期待を大きく上回るような立派なものであった。文法上の誤りが見られないだけではなく、‘a gentleman’ が書いたといっても、その名に恥じないほどの文章であった。「紳士」と呼ばれていた階級の人々が用いる言語表現は、その特徴として、簡単であっても、その一方、力強く、気取らないものであることが挙げられている。さらに、‘good sense’, ‘warm attachment’, ‘liberality’, ‘propriety’, ‘delicacy of feeling’ などが含まれていなければならないのである。Emma は、この手紙が Robert Martin によって書かれたのではなく、ある程度教育を受けた彼の姉妹達の手助けの下に書かれたのではないかと疑ってみるが、女性の書く文面ではない、と結論づける。それは、女性が書いたものにしては力強く、簡潔であり、冗漫でないからである。

男性的言語の在り方が主に述べられていたが、それを逆の視点からみれば女性的言語の在り方が浮かび上がってくるのである。

- (2) “Your friend Harriet will make a much longer history when you see her.—She will give you all the minute particulars, which only woman’s language can make interesting.” (E 472)

先述の典型的な ‘a gentleman’ の言語を操る登場人物の一人として、Jane Austen が登場させているのが Mr. Knightley である。Austen は、当時の社会規範に則る理想的なこの「紳士」に女性の言語に関する発言をさせている。Emma が Mr. Knightley に Harriet と Robert Martin との関係について尋ねた時の Mr. Knightley の返事であるが、自分が説明するよりも、女性である Harriet の口から直接聞いた方がよい、と Emma に伝えている。なぜなら、自分よりももっと長く、詳細に立ち入って全て話してくれるからであり、女性が話してこそ、もっと面白味加わるからである、と女性の言語に言及している。(1)において女性的言語の特徴として挙げてあった「言葉数が多く、冗漫である」点に加えて、「細かな視点から愉快地語られる」点に注意すべきである。

これまで見てきたように、Jane Austen はその作品の中で、18・19世紀の社会を舞台に人間と人間の集団を、社会への関わり方を中心に描き、様々な社会規範に基づく一般論を論じ、その中には「言語」に対して「男性らしさ」・「女性らしさ」を認め、以上のような言語観を示してくれている。

## 2. Lakoff’s Discussion of Women’s Language

Jane Austen の作品中に現われる女性登場人物の女性的言語を幾つか具体的に分析する前に、ここでは、現在の女性的言語の特徴を論じてきた Robin Lakoff の説を紹介して、以下の参考にする<sup>1)</sup>。

- (1) Hedges:

It’s sort of hot in here.

I’d kind of like to go.

I guess...

It seems like...

- (2) (Super) polite Forms:

---

1) Ruth Borker, *et al.*, ed. *Women and Language in Literature and Society* (New York: Praeger Publishers, 1980), p. 96.

I'd really appreciate it if...

Would you please open the door, if you don't mind?

(3) Tag Questions:

John is here, isn't he?

(4) Speaking in Italics:

(intonational emphasis equivalent to underlining words in written language; *so* or *very*, etc.)

(5) Empty Adjectives:

divine / charming / cute / sweet / adorable / lovely

(6) Hypercorrect Grammar and Pronunciation:

(bookish grammar; more formal enunciation)

(7) Lack of a Sense of Humor:

(women said to be poor joke tellers and to frequently "miss the point" in jokes told by men)

(8) Direct Quotations:

(use of direct quotations instead of paraphrases)

(9) Special Lexicon:

(in domains like colors where words like *magenta*, *chartreuse*, and so on are typically used only by women)

(10) Question Intonation in Declarative Contexts:

(For example, in response to the question, "When will dinner be ready?", an answer like "Around 6 o'clock?", as though seeking approval and asking whether that time will be okay)

これは Ronin Lakoff の議論の要約であるが、Austen の作品中の女性登場人物の女性的言語と照らし合わせてみよう。

- (1) 一種の婉曲表現であるが、Jane Austen の女性登場人物ではあまり目立たず、むしろ(4)にも当てはまると言っても良いような、強意的表現・断定的表現が注目されるであろう。
- (2) 勿論、人間対人間の場である社交関係に於いて、社会規範を重視する（主として上流階級の）人物に、この項目は当てはまる。一方、社交の世界に属しながらも、この特徴を示さず、自分の意思・感情を外に出さない、Jane Austen が称する言葉を用いれば、'reserved' な人物がいたり、日常の場でありながらも、何事に於いても感謝の意を述べてまわる（普通の階

級に属する) 人物もいて、必ずしも階級により差があるものではない。

- (3) (10)と関連していることで、直接、疑問文の形を使わず、付加疑問文を好むということである。付加疑問文が備えている幾つかの語用論的機能の中でも、婉曲の機能を持つということである。それゆえ(1)とも関係がある。
- (4) 強意的表現のことである。Jane Austen の作品中に限らず、書き言葉の場合では、イタリック部分や感嘆符などの句読法により読者はこれを判別できる。また、‘very’, ‘so’ だけでなく、‘complete(ly)’, ‘extreme(ly)’, ‘real(ly)’ 等の強意語によっても認められる。さらに、Austen に特徴的なのは、二つの伝達動詞の使い分けであって、‘She said’ と ‘She cried’ によって導入される被伝達文の内容のうち、後者の方がこの強意的表現に分類されるのである。

さらに具体的に言ってみると、副詞的要素は、

[Intensifying Clause]

I assure you / I dare say / I always say / I am sure / I declare / I protest, etc.

[Intensifying Adverb]

absolutely / astonishingly / certainly / completely / decidedly / delightfully / doatingly / entirely / exactly / excessively / extremely / fully / highly / honestly / infinitely / particularly / passionately / perfectly / precisely / really (quite) / quite / so very (truly) / strikingly / truly / undoubtedly / wholly, etc.

[Intensifying Adverb Phrase]

upon my honour / to the last degree / of course / to be quite honest / upon my word, etc.

のように分類され、そしてその他、強意形容詞、形容詞・副詞の最上級表現、強意名詞、強意動詞などが挙げられる。

- (5) 男性的言語にはあまり出てこないとされるもので、評価を表す形容詞である。‘charming (collection)’, ‘delightful (apples)’, ‘excellent (apple-dumpling)’, ‘nice (party)’, ‘shocking (breakfast)’, などが具体的に挙げられるが、(4)の強意形容詞的な働きをも持っている。
- (6) 正確さを重んじるがためにそれだけ堅苦しくなってしまう傾向にある、と言われている。
- (7) 女性は男性のユーモアを解さないというものであるが、Jane Austen の言語観のところでも触れたように、女性の言語は話の内容を愉快にしてくれるものでもあった。
- (8) 人から聞いた発言を噛み砕いて、自分の言葉で要約せず、そのまま直接話法の形で提示す

る傾向がある。Jane Austen の作品中では、話し好き (talkative) の登場人物に多くみられる。

(9) 特に色彩語において男性よりもかなり微妙な区別をしていて、その語彙数も豊富であるとされている。

(10) (1)および(3)の婉曲表現に通じるものである。

以上のことから、現代的視点で考察した女性的言語の特徴の中で、幾つかの項目が Jane Austen が描いた登場人物の言語的特徴の分析に適用できそうであることが分る。

### 3. Analysis of Austen's Characters

#### 3.1 Gentility

これに属する女性登場人物の発話内容には1.1.1の語彙の構造のところで分類した社会の規範に関する語彙が多用される。このことについては、一つに社会の規範に則ることをテーマにした *Mansfield Park* に現われる語彙を分析した David Lodge の ‘The Vocabulary of *Mansfield Park*’<sup>2)</sup> で詳しく取り上げてあるので、ここでは、“Mrs. Weston’s manners were always particularly good. Their propriety, simplicity, and elegance, would make them the safest model for any young woman.” (E 278) と述べる Emma の発言を引用するに留めておく。当時の女性の、社会におけるあるべき姿が、この階級に属する Emma の口で論じられている。

#### 3.2 Fashionability

社交関係では、舞踏会やディナーパーティー、ピクニックや旅、観光・保養地等に関する語彙が身受けられる。社交の場に紹介されて出ていく当時の女性達が日頃どのような関心を持ち、話題にしていたか推察できよう。また、趣味や才芸に関する語彙 (carpet-work, artificial flowers, painting tables, music, transparencies)<sup>3)</sup> もこの頃に属することになる。

具体例を挙げておこう。

to mix in the world / in the first circle / shut up from the society / to go into public  
// introduction / recommendation // Bath / Kings Weston / Clifton // barouche-lan-

2) David Lodge, *Language of Fiction: Essays in Criticism and Verbal Analysis of the English Novel* (London: Routledge and Kegan Paul, 1966), pp. 94-113.

3) R. W. Chapman, *op. cit.*, Vol. IV., p. 508.

dau / carriage / chaise / donkey / horse // exploring, etc.

### 3. 3 Affectation of Gentility

ここでは、‘Gentility’ や ‘Fashionability’ を装う人物, Mrs. Elton の発話内容を取り上げる。Mr. Elton と結婚して、社交の世界から退いた後の自分の生活について述べている。

“Oh! no, indeed; I must protest against any such idea. A superior performer!—very far from it, I assure you. Consider from how partial a quarter your information came. I am doatingly fond of music—passionately fond;—and my friends say I am not entirely devoid of taste; but as to any thing else, upon my honour my performance is *mediocre* to the last degree. You, Miss Woodhouse, I well know, play delightfully. I assure you it has been the great satisfaction, comfort, and delight to me, to hear what a musical society I am got into. I absolutely cannot do without music. It is a necessary of life to me; and having always been used to a very musical society, both at Maple Grove and in Bath, it would have been a most serious sacrifice. I honestly said as much to Mr. E. when he was speaking of my future home, and expressing his fears lest the retirement of it should be disagreeable; and the inferiority of the house too—knowing what I had been accustomed to—of course he was not wholly without apprehension. When he was speaking of it in that way, I honestly said that *the world* I could give up—parties, balls, plays—for I had no fear of retirement. Blessed with so many resources within myself, the world was not necessary to *me*. I could do very well without it. To those who had no resources it was a different thing; but my resources made me quite independent. And as to smaller-sized rooms than I had been used to, I really could not give it a thought. I hoped I was perfectly equal to any sacrifice of that descripton. Certainly I had been accustomed to every luxury at Maple Grove; but I did assure him that two carriages were not necessary to my happiness, nor were spacious apartments. ‘But,’ said I, ‘to be quite honest, I do not think I can live without something of a musical society. I condition for nothing else; but without music, life would be a blank to me.’” (E 276-7)

ピアノをひくのが上手 (a superior performer) である、と言われたのに対して、それを否定することから始まるのであるが、自分はいへん音楽好きの環境 (a very musical society) で

生活を送ってきて、その生活に慣れきってしまっている。パーティーや舞踏会やお芝居がなくても我慢できるが、音楽のない生活は自分には考えられないと、社交界に属していた(ような)ことをひけらかす。さらには、社交の場から退かなければならなくなったこと (retirement) に対して、普通の人にとっては耐えられないことであろうが、自分には資質 (so many resources) があるから大丈夫であると、豪語するのである。

次に、上の引用の特徴的な部分に表示をつけて視覚的に分かり易くしてみよう。

“**Oh! no**, (indeed); I must **protest** against any such idea. A superior performer!—(very) **far** from it, (I assure you). Consider from how partial a quarter your information came. I am (doatingly) fond of music—(passionately) fond;—and my friends say I am not (entirely) devoid of taste; but as to any thing else, (upon my honour) my performance is *mediocre* (to the last degree.) You, Miss Woodhouse, (I well know), play (delightfully.) (I assure you) it has been the **greatest satisfaction, comfort, and delight** to me, to hear what a musical society I am got into. I (absolutely) cannot do without music. It is a necessary of life to me; and ▲having (always) been used to a (very) musical society, both at Maple Grove and in Bath, it would have been a (most) **serious sacrifice**. I (honestly) said as much to Mr. E. when he was speaking of my future home, and expressing his **fears** lest the retirement of it should be **disagreeable**; and the **inferiority** of the house too—knowing what I had been accustomed to—(of course) he was not (wholly) without **apprehension**. When he was speaking of it in that way, I (honestly) said that the world I could give up—parties, balls, plays—for I had **no fear** of retirement. ▲**Blessed** with (so) many resources within myself, the world was not necessary to *me*. I could do (very) well without it. To those who had no resources it was a different thing; but my resources made me (quite) independent. And as to smaller-sized rooms than I had been used to, I (really) could not give it a thought. I hoped I was (perfectly) equal to **any sacrifice** of that description. (Certainly) I had been accustomed to **every luxury** at Maple Grove; but I **did** assure him that two carriages were not necessary to my happiness, nor were spacious apartments. ‘But,’ said I, ‘(to be quite honest,) I do not think I can live without something of a musical society. I condition for **nothing** else; but without music, life would be a **blank** to me.’” (E 276-7)

(括弧内は強意副詞相当語句、太文字はその他の強意語句、一重下線部は社交関係・才芸

関係の語句、二重下線部は伝達部、波線部は *Vulgarism*、▲は省略を示すものである。) )

先述の社交関係の語彙や、自らの才芸や資質に関する語彙が見られるにもかかわらず、この人物が決して上品で立派な性格を持つ人間に思えないのはどういうわけであろうか。あまりにも「わざとらしさ」や「気取ったところ」が目につくのは、2.(3)(4)(5)(8)で触れたような特徴が前面にあるからである。また、以下の3,5で考察する *Vulgarism* の要素がこのことを読者に対して決定的にするのである。

### 3. 4 Talkativeness

Norman Page が挙げた発話による性格付けが最も成功した例のもう一方の Miss Bates の具体例<sup>4)</sup>を分析してみよう。この登場人物がパーティーに招かれ、そこにいる他の招待客達と挨拶を交わす場面である。他の人物の発話部分は描かれてなく、最初から最後まで、この人物によるものである点にも注意することである。

“So very obliging of you!—No rain at all. Nothing to signify. I do not care for myself. Quite thick shoes. And Jane declares—Well!—(as soon as she was within the door) Well! This is brilliant indeed!—This is admirable!—Excellently contrived, upon my word. Nothing wanting. Could not have imagined it.—So well lighted up.—Jane, Jane, look—did you ever see any thing? Oh! Mr. Weston, you must really have had Aladdin’s lamp. Good Mrs. Stokes would not know her own room again. I saw her as I came in; she was standing in the entrance. ‘Oh! Mrs. Stokes,’ said I—but I had not time for more.”—She was now met by Mrs. Weston.—“Very well, I thank you, ma’am. I hope you are quite well. Very happy to hear it. So afraid you might have a headach!—seeing you pass by so often, and knowing how much trouble you must have. Delighted to hear it indeed. Ah! dear Mrs. Elton, so obliged to you for the carriage!—excellent time.—Jane and I quite ready. Did not keep the horses a moment. Most comfortable carriage.—Oh! and I am sure our thanks are due to you, Mrs. Weston, on that score. Mrs. Elton had most kindly sent Jane a note, or we should have been.—But two such offers in one day!—Never were such neighbours. I said to my mother, ‘Upon my word, ma’am——.’ Thank you, my mother is remarkably well. Gone to Mr. Woodhouse’s. I made her take her shawl—for the evenings are

4) Norman Page, *Speech in the English Novel* (London: Longman, 1973), p. 15.

not warm—her large new shawl—Mrs. Dixon’s wedding present.—So kind of her to think of my mother! Bought at Weymouth, you know—Mr. Dixon’s choice. There were three others, Jane says, which they hesitated about some time. Colonel Campbell rather preferred an olive. My dear Jane, are you sure you did not wet your feet?—It was but a drop or two, but I am so afraid:—but Mr. Frank Churchill was so extremely—and there was a mat to step upon—I shall never forget his extreme politeness.—Oh! Mr. Frank Churchill, I must tell you my mother’s spectacles have never been in fault since; the rivet never came out again. My mother often talks of your goodnature. Does not she, Jane?—Do not we often talk of Mr. Frank Churchill?—Ah! here’s Miss Woodhouse.—Dear Miss Woodhouse, how do you do?—Very well I thank you, quite well. This is meeting quite in fairy-land!—Such a transformation!—Must not compliment, I know—(eyeing Emma most complacently)—that would be rude—but upon my word, Miss Woodhouse, you do look—how do you like Jane’s hair?—You are a judge.—She did it all herself. Quite wonderful how she does her hair!—No hairdresser from London I think could.—Ah! Dr. Hughes I declare—and Mrs. Hughes. Must go and speak to Dr. and Mrs. Hughes for a moment.—How do you do? How do you do?—Very well, I thank you. This is delightful, is not it?—Where’s dear Mr. Richard?—Oh! there he is. Don’t disturb him. Much better employed talking to the young ladies. How do you do, Mr. Richard?—I saw you the other day as you rode through the town—Mrs. Otway, I protest!—and good Mr. Otway, and Miss Otway and Miss Caroline.—Such a host of friends!—and Mr. George and Mr Arthur!—How do you do? How do you all do?—Quite well, I am much obliged to you. Never better.—Don’t I hear another carriage?—Who can this be?—very likely the worthy Coles.—Upon my word, this is charming to be standing about among such friends! And such a noble fire!—I am quite roasted. No coffee, I thank you, for me—never take coffee.—A little tea if you please, sir, by and bye,—no hurry—Oh! here it comes. Everything so good!” (E 322-3)

これまでみてきたような強意語が目につくだけでなく、文の短さや感嘆文の多さもすぐに見て取れるであろうが、同じく3.3のように表示をつけてみよう。

“▲(So very) obliging of you!—▲No rain at all. ▲Nothing to signify. I do not

care for myself. ▲**Quite** thick shoes. And Jane declares—**Well!**—(as soon as she was within the door) **Well!** This is **brilliant** (indeed)!—This is **admirable!**—▲(Excellent) contrived, (upon my word.) ▲**Nothing** ▲wanting. ▲Could not have imagined it.—▲(So well) lighted up.—Jane, Jane, look—did you ever see any thing? **Oh!** Mr. Weston, you must (really) have had Aladdin's lamp. **Good** Mrs. Stokes would not know her own room again. I saw her as I came in; she was standing in the entrance. 'Oh! Mrs. Stokes,' said I—but I had not time for more."—She was now met by Mrs. Weston.—“▲(Very) well, I thank you, ma'am. I hope you are (quite) well. ▲(Very) happy to hear it. ▲(So) afraid you might have a headach!—seeing you pass by (so) often, and knowing (how) **much** trouble you must have. ▲Delighted to hear it (indeed). **Ah!** dear Mrs. Elton, (so) obliged to you for the carriage!—▲**excellent** time.—Jane and I ▲(quite) ready. ▲Did **not** keep the horses **a moment**. ▲**Most** comfortable carriage.—Oh! and (I am sure) our thanks are due to you, Mrs. Weston, on that score. Mrs. Elton had (most kindly) sent Jane a note, or we should have been.—But two **such** offers in one day!—(Never) were **such** neighbours. I said to my mother, '(Upon my word,) ma'am——.' ▲Thank you, my mother is (remarkably) well. ▲Gone to Mr. ▲Woodhouse's. I made her take her shawl—for the evenings are not warm—her large new shawl—▲Mrs. Dixon's wedding present.—▲(So) kind of her to think of my mother! ▲Bought at Weymouth, (you know)—Mr. Dixon's choice. There were three others, Jane says, which they hesitated about some time. Colonel Campbell (rather) preferred an olive. My dear Jane, are you sure you did not wet your feet?—It was but a drop or two, but I am (so) afraid:—but Mr. Frank Churchill was (so extremely)—and there was a mat to step upon—I shall (never) forget his (extreme) politeness.—**Oh!** Mr. Frank Churchill, I must tell you my mother's spectacles have (never) been in fault since; the rivet (never) came out again. My mother often talks of your goodnature. Does not she, Jane?—Do not we often talk of Mr. Frank Churchill?—**Ah!** here's Miss Woodhouse.—Dear Miss Woodhouse, how do you do?—▲(Very) well I thank you, (quite) well. This is meeting (quite) in **fairy-land!**—▲(Such) a **transformation!**—Must not compliment, (I know)—(eyeing Emma most complacently)—that would be rude—but (upon my word,) Miss Woodhouse, you **do** look—how do you like Jane's hair?—You are a judge.—She did it (all herself.) ▲(Quite) **wonderful** how she does her hair!—**No** hairdresser from London (I think)

could.—Ah! Dr. Hughes (I declare)—and Mrs. Hughes. ▲Must go and speak to Dr. and Mrs. Hughes for a moment.—How do you do? How do you do?—▲(Very) well, I thank you. This is **delightful**, is not it?—Where's dear Mr. Richard?—Oh! there he is. Don't disturb him. ▲(Much) better employed talking to the young ladies. How do you do, Mr. Richard?—I saw you the other day as you rode through the town—Mrs. Otway, (I protest)!—and good Mr. Otway, and Miss Otway and Miss Caroline.—▲**Such** a host of friends!—and Mr. George and Mr Arthur!—How do you do? How do you all do?—▲(Quite) well, I am (much) obliged to you. ▲(Never) better.—**Don't** I hear another carriage?—Who can this be?—(very) likely the **worthy** Colles.—(Upon my word), this is **charming** to be standing about among **such** friends! And **such** a noble fire!—I am (quite) **roasted**. ▲**No** coffee, I thank you, for me—▲(never) take coffee.—▲A little tea if you please, sir, by and bye,—**no** hurry—Oh! here it comes. **Everything** ▲(so) good!" (E 322-3)

強意語句が多いこと、主語の省略・主語+BE 動詞の省略が頻繁に行われていること、不完全文が目立つことなどの他に、全体的に、短文で構成されていることに触れてみよう。637語で成りたっているこの発話中には、ピリオドが54個、疑問符が15個、感嘆符が27個、そしてダッシュが59個も含まれている。機械的に一文の長さを出してみると、5.7語と非常に短くて、普通の登場人物のおよそ1/2から1/3程度の長さにすぎないのである。この事実からもわかるように、Miss Bates は、とても感情的な、興奮した話し方で、話題転換が多く、とりとめもないことを次から次へと口に出しているのである。“What was I talking of?” や “I declare I cannot recollect what I was talking of.” (E 237) のようなセリフはさらに滑稽な様子をも伝えてくれる。

### 3. 5 Vulgarism

この要素は、必ずしも女性特有の言語的特徴というわけではないが、Jane Austen の女性登場人物の区別をつけるためには欠かすことのできないものである。ここで最後に取り上げておくことにする。なお、この項は K. C. Phillipps がその著書 *Jane Austen's English* の中で、第1章：語彙 (Vocabulary)、第2章：文法 (Syntax)、第3章：呼称法 (Modes of Address) の三つの章に分け言及している<sup>5)</sup> ので、それを参考にしてまとめてみる。

#### 3. 5. 1 Vocabulary

5) K. C. Phillipps, *Jane Austen's English* (London: Andre Deutsch, 1970).

ここでは、‘vulgar’ とされる語彙を以下に数例取り上げる。ただし、‘colloquial’ の部類に入る語彙との区別が極めて困難な場合がある。

## (1) beau:

Here comes this dear old beau of mine, I protest! (*E* 302)

## (2) caro sposo:

Jane, Miss Bates, and me—and my caro sposo walking by. (*E* 356)

(3) explore: We had a delightful exploring party from Maple Grove to Kings Weston. (*E* 354)

## (4) pitiful:

Very little white satin, very few lace veils; a most pitiful business! (*E* 484)

## (5) treasure:

That Mrs. Whitaker is a treasure! (*MP* 105)

(1) 「男」のことを指し示し、当時流行していたものである。従って、‘colloquial’ な語彙であるとも考えられるが、上品な (refined) 人物の発話部分には出てこないことも付け加えておこう。

(2) イタリア語で「夫」を表す。Mrs. Elton にこの語を使わせて、教養ぶった (pedantic), そして気取った (affected) 雰囲気を与えている。

(3) 単に「野山を歩き回る」こと (a country ramble) に対する動詞形である。おおげさで (strong), わざとらしい (pretentious) 表現である。

(4) 「取るに足らないことに対して激しく残念がる」こと (exciting pity for its littleness and meanness) の形容詞で、‘mean’ や ‘scrimping’ と同義語である。この語もまた、立派な人物 (the best characters) の発話の中には現われない。

(5) 高い評価を表す、文字どおりの意味で用いられているが、強意語の一つで、良い話し言葉 (the best spoken English) を心がけようとする人は使わないとしている。

### 3. 5. 2 Syntax

文法現象にみられる Vulgarity を10項目に分類して、以下に具体例を示す。

(1) 過去時制を現在時制で代用

(2) 分詞に対する主語の不一致

(3) 誤った動詞の活用

1) 過去分詞形

- 2) 仮定法過去形
  - (4) 一致原則の違反
    - 1) 数に対する違反
    - 2) 主語に対する違反
  - (5) 代名詞
    - 1) 代名詞の省略
    - 2) 主格を目的格で代用
  - (6) 関係詞
    - 1) *that* を *as* で代用
    - 2) *but* を *but what* で代用
    - 3) *whom* を *who* で代用
  - (7) 副詞を形容詞形で代用
  - (8) 副詞
    - 1) 強意副詞
    - 2) 否定縮約形
    - 3) 多重否定
  - (9) 前置詞
    - 1) 前置詞の省略
    - 2) 前置詞の意味の誤用
  - (10) 接続詞
    - 1) *that* を *if* で代用
    - 2) 接続詞句
- (1) Present Tense for Past Tense:  
I see Mr. Ferras myself ma'am. (SS 354)
- (2) Loose Use of Participle:  
My paper reminds me to conclude, and begging to be most gratefully and respectfully remembered to her, and to Sir John. (SS 278)
- (3) “Irregular” Conjugation
- 1) Past Participle Form: have went (SS 217) / have gave (SS 240)
  - 2) Subjunctive Form: if I was her (PP 228)
- (4) Discrepancy of Concord

- 1) Number: I believe there is two of them. (*E* 238)
- 2) Subject: I felt sure that you was angry with me. (SS 146)
- (5) Personal Pronoun
  - 1) Omission: Miss Jane Fairfax's compliments and thanks, but is quite unequal to any exercise. (*E* 390)
  - 2) Objective Form for Subjective Form:
    - Neither Mr. Suckling nor me had ever any patience. (*E* 321)
    - You do not know him so well as me, Miss Dashwood. (SS 130)
- (6) Relative
  - 1) *as* for *that*: And his lady too, Miss Steele as was. (SS 354)
  - 2) *but what* for *but*: Not that I think Mr. Martin would ever marry any body but what had some education. (*E* 31)
  - 3) *who* for *whom*: The name of the man on who all my happiness depends. (SS 131)
- (7) Adjective for Adverb:
  - Jane speaks so distinct. (*E* 158)
  - I hear he is quite a beau, and prodigious handsome. (SS 125)
- (8) Adverb
  - 1) Intensifying Adverb: vast(ly)
  - 2) Negative Contraction: I shan't go if Lucy an't there. (SS 292)
  - 3) Multiple Negative: Now he had no fortune, and no nothing at all. (SS 273)
- (9) Preposition
  - 1) Omission: He was four-and-twenty the 8th of last June. (*E* 30)
  - 2) Misuse: We did not know what was become with him. (SS 273)
- (10) Conjunction
  - 1) *if* for *that* : I declare if she is not gone away without finishing the wine! (SS 194)
  - 2) Conjunctive Group: Just like her! so considerate!—But however, she is so far from well. (*E* 161)

### 3. 5. 3 Modes of Address

Vulgarity の最後の要素として、呼称法を取り上げておく。

- (1) (Free Use of) Christian Name Alone:

[Frank Churchill writes:] “Jane,” indeed!—You will observe that I have not yet indulged myself in calling her by that name, even to you. Think, then, what I must have endured in hearing it bandied between the Eltons with all the vulgarity of needless repetition, and all the insolence of imaginary superiority. (*E* 441-2)

(2) Surname Alone:

Knightley is quite the gentleman. (*E* 278-9)

(3) Both Christian Name and Surname with no Prefix:

So Frank Churchill is a capital dancer, I understand. (*E* 324)

(4) Surname Abbreviated to Initial:

I shall speak to Mr. E. (*E* 295)

(5) *Caro Sposo*:

The thing would be for us all to come on donkies, Jane, Miss Bates, and me—and my caro sposo walking by. (*E* 356)

- (1) 当時は、今日よりももっと形式的な呼び方をしていてクリスチャンネームだけで呼び合うのは、極く限られた親密な仲だけであったと言われている。一例挙げてみよう。

“‘Mr. Knightley.’—You always called me, ‘Mr. Knightley;’ and, from habit, it has not so very formal a sound.—And yet it is formal. I want you to call me something else, but I do not know what.”

“I remember once calling you ‘George,’ in one of my amiable fits, about ten years ago. I did it because I thought it would offend you; but, as you made no objection, I never did it again.”

“And cannot you call me ‘George’ now?”

“Impossible!—I never can call you any thing but ‘Mr. Knightley.’” (*E* 462-3)

結婚も決まろうとしている仲なのにクリスチャンネームだけで‘George’と呼ぶことに依然として抵抗のある Emma と対照的に、Mrs. Elton はそれほど親しい関係でもない Jane Fairfax をクリスチャンネームの Jane だけで馴れ馴れしく呼び捨てる。それを Jane Fairfax の婚約者である Frank Churchill が、自分でもそんな呼び方をしたことがないのにと、Mrs. Elton の無礼さや思い上がりを非難している。

- (2) Mrs. Elton の発言部分である。苗字だけで人を呼ぶことが当然大変な無礼であったこと

が、これに続く Emma の

“Insufferable woman!” was her immediate exclamation. “Worse than I had supposed. Absolutely insufferable! Knightley!—I could not have believed it. Knightley—never seen him in her life before, and call him Knightley!” (E 279)

という発言内容からもわかる。それまで面識もなかった人に対して、このような呼び方をすると、我慢ならない人だ。品のない、図々しい、見栄っぱりな人物だと評している。

(3) これもまた以下では Emma が

“Poor Jane Fairfax!”—thought Emma.—“You have not deserved this...The kindness and protection of Mrs. Elton!—‘Jane Fairfax and Jane Fairfax.’ Heavens! Let me not suppose that she dares go about, Emma Woodhouse—ing me!—But upon my honour, there seem no limits to the licentiousness of that woman’s tongue!” (E 284)

と評し、‘Jane Fairfax and Jane Fairfax’ と呼びつづけてばかり、お願いだから、自分のことを ‘Emma Woodhouse’ と呼ばないでほしい。全く、Mrs. Elton は世間知らずで、礼儀作法なんてものがないのだからと、厳しい発言である。

(4) 会話の中では、苗字を短縮してイニシャルで呼ぶのは、現代においても ‘Vulgar’ であるといわれている。結婚することになった相手の ‘Mr. Knightley’ に対して、Emma は ‘I never can call you any thing but’ Mr. Knightley’. I will not promise even to equal the elegant terseness of Mrs. Elton, by calling you Mr. K.’’ (E 463) と言い、自分にはどうしても ‘Mr. Knightley’ としか呼べず、苗字のイニシャルだけで呼ぶ Mrs. Elton の簡潔な言い回しを真似する気はないと皮肉るのである。

(5) 3.5.1の Vocabulary でも取り上げたことである。同じく Emma の “‘A little uptart, vulgar being, with her Mr. E., and her caro sposo.’” (E 356) という発言が続き、Mrs. Elton の Vulgarity を決定づける。

以上見てきたように Jane Austen の作品に登場する人物の発話を類型化することにより5通りに分類できる。Gentility と Fashionability は主に語彙から、Vulgarity は K. C. Phillipps に従うと、語彙・文法・呼称法のそれぞれの点から、そしておよそその中間に位置するものと考えられる Affectation と Talkative は、一般の語彙やそれをもとにした発話の中

に *Vulgarism* の要素が加わることによって、認知・識別できるというわけである。Austen の作品はその内容において極めて類似点が多く見られ、均質化しているので、この種の分類法は比較的容易に応用できるのである。このように Austen の作品中の人物だけでなく、同時代と考えられる、テーマの異った冒険物語や悪漢物語中の女性と女性の言語をも視野に入れた社会言語学的研究が今後待たれることになるのである。

#### 参 考 文 献

- Burrows, J. F. 1987. *Computation into Criticism*. Oxford: Clarendon Press.  
Craik, W. A. 1965. *Jane Austen: The Six Novels*. London: Methuen.  
Lakoff, Robin. 1975. *Language and Woman's Place*. New York: Harper & Row.  
Leonard, Sterling Andrus. 1962. *The Doctrine of Correctness in English Usage, 1700-1800*. New York: Russell & Russell.  
Lodge, David. 1966. *Language of Fiction: Essays in Criticism and Verbal Analysis of the English Novel*. London: Routledge and Kegan Paul.  
Phillipps, K. C. 1970. *Jane Austen's English*. London: Andre Deutsch.  
Page, Norman. 1972. *The Language of Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell.  
———. 1973. *Speech in the English Novel*. London: Longman.  
Scherer, Klaus R. and Giles, Howard. 1979. *Social Markers in Speech*. Cambridge: Cambridge University Press.  
Tave, S. M. 1973. *Some Words of Jane Austen*. Chicago: Unive. of Chicago Press.